

動検で初めて口蹄疫の活性ウイルス分離

～中国からの旅客が携行した山羊肉から～

今年 1 月に北海道・新千歳空港で旅客が携帯品として持ち込んだ山羊肉から、感染性を維持した口蹄疫ウイルスが分離されていたことが明らかとなった。既にアフリカ豚熱(ASF)については、これまでに 4 例、生きたウイルスを分離した事例が報告されているが、口蹄疫ウイルスでは初めてのケースとなる。

問題の事例は、今年 4 月 24 日までに 3 例(うち 1 例は国際郵便物での摘発)、口蹄疫ウイルスが PCR 陽性となっていたものの 1 つ。9 月 9 日に開催された農水省の家畜衛生関連の会合で説明された話題をメディアが拾って大きく報道されるところとなった。

ウイルス分離検査で陽性となったのは、2026 年 1 月 11 日に新千歳空港に中国から到着した便の旅客が持ち込んだ山羊肉 8.23 kg。手荷物カウンターで検疫探知犬により摘発されたものではなく、航空会社からの申告を受けて検査を行って摘発されたもの。持ち込んだ旅客は特定されている。分離されたウイルスの血清型は O 型だった。

動物検疫所が公表しているデータによると、ASF については今年 8 月末時点で旅客携帯品から 273 例、国際郵便物から 164 例の計 437 例が摘発されており、このうち携帯品の 4 例で、ウイルス分離検査により感染性のあるウイルスが確認されている。動物検疫所では、口蹄疫と ASF と鳥インフルエンザを対象に検査を実施しており、豚は口蹄疫と ASF の検査対象となっている。ASF の陽性事例が圧倒的に多い背景としては、ASF 検査を

行ったすべての検体について口蹄疫の検査も行われたかどうか(分母)が公表されていないため確かなことは言えないが、①中国をはじめ東南アジア全域に短期間に感染拡大し、ウイルスが濃厚にまん延したこと、②ASF ウイルスが熱や酸に対する耐性がとくに高いという性質であること、が関与している可能性は高く、口蹄疫よりも侵入しやすく、侵入したあと不活化されるまでの時間が長いことを前提に防疫態勢を考える必要があることを、あらためて認識しなければならない。

隣国では口蹄疫の感染も相次ぎ要注意！

～中国では今年初めて SAT1 型の感染確認～

農水省がこれまでにまとめた各国の「口蹄疫の発生状況」によると、韓国では 9 月 2 日、慶尚北道において、牛における 2 例の口蹄疫発生が確認された。血清型はその後、O 型だと公表されている。同国では今年に入って 11 例の感染が確認されており(いずれも O 型)、その内 1 例は慶尚北道で 5500 頭を飼養する養豚場での発生だった。一方、中国では 9 月 8 日、豚において口蹄疫の感染が新たに確認されている。血清型は O 型。同国では今年に入って 3 例の口蹄疫発生が通報されており、とくに 3 月 21 日に甘肅省で、26 日に新疆ウイグル自治区で確認された 2 例は、これまでに中国で確認されていなかった SAT1 型ウイルスによる牛での感染だった。

SAT1(Southern African Territories 1)型は本来、アフリカ中南部で常在する血清型だが、遺伝子解析により、中東・中央アジアを經由して伝播したと考えられている。中国ではこれまで、O 型、A 型、Asia1 型の発生歴があり、それらに対するワ

クチンは使用されてきたが、SAT1 型はなかった。中国当局は新たな血清型に対応するワクチンの開発を急ぎ、感染確認から 1 ヶ月以内には複数のワクチンが承認を受け、感染が確認された新疆ウイグル自治区と甘粛省の感染地域における封じ込めに利用されているとされる。ただ、直近の重慶市における感染は、豚における O 型の感染だった。新千歳空港に不当に持ち込まれた山羊肉で分離されたウイルスも O 型だったが、2019 年以降に報告された中国の発生事例のなかに、山羊での感染事例はない。なお、中国で緊急承認・製造されている複数の SAT1 型ワクチンは、いずれも不活化ワクチンとされている。過去に粗悪な弱毒生ワクチンが広く使用され、抗原ウイルスの病原性復帰などで深刻な感染拡大をもたらした経験を踏まえ、中国当局は口蹄疫の弱毒生ワクチンの使用を 1980 年前後に禁止している。しかし、安価な非正規の「闇ワクチン」が出回る状況は 1990 年代にも続いていたとされており、2000 年に 92 年ぶりに宮崎県と北海道でごく限られた牛での感染をもたらした口蹄疫ウイルスは、そうしたワクチン由来ウイルスによる感染だったとの指摘もある。

韓国では隣接する中国で 3 月に SAT1 型による口蹄疫が確認されたことを受け、ワクチンを備蓄していない SAT1 ウイルスに対し、欧州等のグローバルワクチンメーカーから野外株との識別が可能な SAT1 ワクチンを緊急調達し、5 月中旬から 6 月にかけて、南北国境沿いの 11 市・郡で飼養されている約 17 万頭の家畜に緊急接種している。年内に 1000 万ドーズ規模の備蓄を計画しているとも伝えられている。ASF 警戒下、ワクチンの使えない伝染病への備えをさらに強化する必要がある。

8 月の東京「上」前年比 99.4%の 66 円 ～と畜頭数は 130 万 5544 頭で前年比 101.9%～

農畜産業振興機構(ALIC)は 9 月 10 日、7 月の食肉関連の統計データを更新した。これによると、7 月の全国と畜頭数は 130 万 5544 頭で対前年比 101.9%、前月比 101.3%だった。平均枝肉

重量は 79.0 kg となり、前年比 101.4% 前月比 98.8%だった。と畜頭数の今年度 7 月までの累計は 519 万 2343 頭で、前年比 100.1%だった。

一方、枝肉相場情報は 8 月データが示され、これによると、8 月の東京市場の「上」平均価格は 665 円となり、7 月の 730 円から 65 円の値下がり、対前同月の 669 円に比べると 4 円の値下がりとなった。大阪市場の「上」平均価格は 679 円となり、7 月の 740 円から 61 円の値下がり、対前同月の 902 円に比べると 223 円の値下がりとなった。

7 月輸入量は前年比 12.1%増 9 万 2726 t ～ASF 発生から半年のスペインまだ 5720t実績～

財務省「貿易統計」によると、7 月の豚肉輸入量は 9 万 2726t で、対前年同月比 112.1%となった。内わけは、生鮮・冷蔵(チルド)が 3 万 8250t (対前年 111.9%)、冷凍が 5 万 4472t(112.3%)だった。これにより 2026 年度の累計(4～7 月)量は 37 万 6401t で、前年比 107.3%となっている。

国別に見ると、①カナダ 2 万 4412t(100.5%)、②米国 2 万 1593t(119.3%)、③ブラジル 1 万 4962t(168.0%)、④メキシコ 1 万 226t(125.4%)、⑤デンマーク 5064t(167.6%)、⑥チリ 3961t (111.1%)、⑦スペイン 3065t(22.3%)、⑧その他 9444t(322.4%)、などとなっている。アフリカ豚熱 (ASF)の発生に伴い輸入停止が続いているスペインの輸入量が激減するなか、ブラジルの輸入増に拍車がかかった形になっている。

スペインで ASF が確認されたのは昨年 11 月 28 日のことで、日本政府は直ちに豚肉・豚肉加工品の輸入停止措置をとった。対象となるのは昨年 10 月 30 日以降にパッキングされた豚肉・加工品の輸入とされ、1.5 ヶ月前後とされる輸送期間、フローズンの在庫期間などを考慮すると、既に発生から 9 ヶ月が経過した時点での実績となるだけに、そろそろゼロになっておかしくない時期となっている。スペインは 2025 年度に 14 万 5534t 輸入した第 3 位の輸入元であり、その代替供給先としてブラジルをはじめ各国の伸びが大きくなっている。